

日英両国語比較 (XXVI)

馬 場 熙

A COMPARATIVE STUDY FOR JAPANESE IN LEARNING ENGLISH (XXVI)

Hiroshi Baba

Abstract

There are many thousands of words in a language and some of them have a great diversity of meanings. It seems reasonable to suppose that some English words and Japanese words have multiple meanings or many different meanings. That is what we call **polysemy**,¹⁾ having many meanings, which is a (linguistic) term for words or items of language with two or more senses.²⁾ This paper intends to discuss and compare how the verbs work in a clause in both Japanese and English languages: How the syntactic roles of the verbs correspond and relate to the semantic features or distinctive qualities of verbs in both Japanese and English.³⁾ In order to consider how the varying grammatical behaviours of words are a consequence of their meaning differences,⁴⁾ it is necessary to quote from what R. M. W. Dixon says in his writings: *...semantic roles may be associated with grammatical relations.*⁵⁾ This clearly shows that semantic roles are associated with grammatical classes.⁶⁾

Key Words: verb, polysemy, syntactic roles, semantic roles, grammatical classes.

There are, perhaps, a great many kinds of languages in the world, and no kind is without meaning.⁷⁾

U. 動詞の機能と意味の解説的關係論について

1. 非乖離的連接としての動詞機能と意味の役割

文あるいは節における中心的役割を果たす要素は、動詞であるというのが、R. M. W. Dixonの主張である。

A verb is the centre of a clause. A verb may refer to some activity and there must be a number of participants who have roles in that activity (e. g. *Sinbad carried the old man*); or it may refer to a state, and there must be a participant to experience the state (e. g. *My leg aches*).⁸⁾

中心的役割を果たす要素というのは、第一に、動詞がある何らかの行動や活動に言及しているという事であり、そこには必ず活動の役割を引き受ける参加者または関与者がいるのである。それを例文で示すと、「シンバッドは老人を連れて行った。」となる。第二に、動詞はある状態について言及し、またその状態の経験者という事になる。それを例文で示すと「脚が痛い」となる。最初の例文を解説すると、行為者はシンバッドであり、行為者がどのような行為をしたか

というと、「連れて行った」という行為をしたのである。次に行為者が連れて行った場合、一体何を、あるいは誰を連れて行ったのかという疑問が自然と湧き起こってくるのである。この例文では、「老人」という人または人間を「連れて行った」のである。以上が意味論的役割という観点からの解説である。次に統語論的解説は、次のようになる。英語における主語は、“Sinbad”であり、動詞は、“carried”であり、目的語は、“the old man”である。英語における主語の機能は、文の主要な構成要素であり、論理的には二元論における一元を担い、残りの一元は述語となる。最初の英語の例文でいうならば、主要な一元である主語は、“Sinbad”であり、二元目である述語は、“carried the old man”となる。二番目の例文でいうならば、主要な一元である主語は“My leg”であり、二元目である述語は“aches”となる。日本語では、主語が「シンバッド」で、これが主要な一元目となり、述語は「老人を連れて行った」になり、これが二元目となる。また述語の部分の語順では、日本語と英語では異なっている。具体的には、「老人を連れて行った」の「連れて行った」という動詞部分が、英語では「老人を」という語より先にきている。「老人を」という語は「連れて行った」の後にきている。語順に関しては、日本語が、「シンバッドは → 老人を → 連れて行った」になり、英語は、「シンバッド」→「連れて行った」→「老人を」となる。従って、両国語とも、述語内の語順が違っているという事になる。具体的には、predicateを構成している各々の要素の位置付けが日本語と英語ではことなっているのである。

それでは次に述語について基本概念の解説を試みしてみる事にする。統語論的には文の主要な構成要素の一つであり、上述されたように、二元論において主語の後に位置付けられている二元目という事になる。述語の構成要素は動詞と動詞の支配を受けている語や動詞を修飾している語によって構成されているのである。文全体的の行動や行為を遂行したり主語の状態を表したりするのである。⁹⁾ 語源的にはラテン語の *predicatus* からきて英語に導入されたのであるが、その表記上の意味は“make known”で、日本語の意味は「知らせる、発表する」である。この表記上の意味というのは、主語に対する述語の役割の事であり、主語の行動内容や主語がどのような状態であるかを知らせるという意味での“make known”なのである。次の解説で主語と述語が示される：

In the sentence *Pat has joined our club*, *Pat* is the subject and *has joined our club* is the predicate. In both grammar and logic, the predicate serves to make an assertion or denial about the subject of the sentence. In some analyses, the predicate does not include optional constituents, so that *today* is not part of the predicate in *Pat has joined our club today*.¹⁰⁾

上の例文では“Pat”が主語、“has joined our club”が述語である。この述語が、主語がどのような行動を具体的にとったかを「公に知らせているの」が“make known”という概念である。述語をさらに具体的に解説するならば、この述語の中には、“has joined”という動詞としての構成要素と“our club”という目的語の構成要素が存在している。述語全体の概念は「主語について知らせる」であるが、動詞としての構成要素はまた“today”という項目が文の最後から二番目にきているものの、これは述語の構成要素には入らないとする意見もあるという事を、上の引用文は示している。ここで問題点となるのは、動詞と目的語の関係である。動詞と

目的語の二要素で述語が形成されいるが、動詞はラテン語の *verbum* から英語に導入されて専門用語となったが、主語の属性の出現・発生という概念が動詞自体の中にあり、それが機能しているのである。この動詞の概念と機能を受けて、主語の行為・行動・状態・条件等を表明する働きが、動詞にはある。¹¹⁾ 従って、上の例文の主語の行為の発生は“has joined”によってなされた事になる。英語の概念表記は“performance”、および“occurrence”等となり、主語が自らの行動を表したり、主語が主語として起こった場合の概念は、“performance”は“someone that performs”となり、“occurrence”の場合は“something that happens”となる。上の例文の場合、主語が「人」で、その人が「加入」という行為を「遂行した」ので、“someone that performs”という範疇または項目に入ってくる。換言すれば、動詞は八品詞用語¹²⁾の一つであると同時に述語の主要な働きしながら、行為や状態を表わす事ができるのである。また動詞は時制、様相、態、叙法によって変化する特質があり、主語または目的語と呼応するのである。¹³⁾ 目的語と呼応するという事は、主語が起因し、行為・動作が作動して、主語の動作の対象へと至るのである。この主語の動作の対象となる要素が目的語である。時には動詞句が主語の行為・動作を表記する場合、動詞句で用いられた前置詞などが、主語の動作の対象となるのである。¹⁴⁾ 次に目的語の基本概念であるが、述語中の動詞との関係で論じる必要がある。動詞という用語は基本的には品詞名を表記する記号であるが、文構造を表すときにも使用される記号である。動詞との関係で目的語を論じる事を前提する場合には、例文を例示しながら考察してみる。

- (1) a. I sent *my bank* a letter.
 b. 取り引き銀行に手紙をおくった。
 c. I sent a letter to my bank.¹⁵⁾

上記例文(1) a においては、主語 (Subject) が I、動詞 (Verb) が sent、間接目的語 (Indirect Object) が *my bank*、直接目的語 (Direct Object) が a letter であるが、問題となる英語は 1 c の例文において、“to my bank”も間接目的語として成り立つという見解であるが、目的語になりうる語句は名詞、代名詞、名詞句、名詞節などの名詞類であるから、“to my bank”は目的語とはなりえない事になる。理由は“my bank”の前に前置詞の“to”が置かれて、名詞相当語句から副詞相当語句に変化しているからである。名詞というのはあくまでも文構造における主語や目的語としての機能であり、人、場所、物、状態、属性を指し示しているのである。

次の例文は“to my bank”が目的語になりえない理由を示すために、例示するものである。

- (2) a. *The crew* boarded the vessel.
 b. 船員が乗船した。
 (3) a. They will clean up *the waste*.
 b. 彼らは掃除をしてくれいにするだろう。
 (4) a. I told the committee *my views*.
 b. 私は委員会に自分の見解を話した。
 (5) a. One fascinating discovery was a *musket*.

- b. マスケット銃が見つかった事は大変興味ある発見であった。
- (6) a. Everybody thought her *the best candidate*.
 b. だれしも彼女が最もよい候補者と思った。
- (7) a. We saw them *last night*.
 b. 昨晚彼らとたまたま会った。
- (8) a. We did it *for Tony*.¹⁶⁾
 b. トニーのためにそれをした。¹⁷⁾

上記例文の(2)aの名詞句“the crew”は主語、(3)aの“the waste”は直接目的語、(4)aの“my views”は間接目的語、(5)aの“musket”は主格補語、(6)aの“the best candidate”は目的格補語、(7)aの“last night”副詞的目的格、(8)aの“for Tony”は前置詞補語となる。特に最後の(8)aの“for Tony”は直接目的語“it”と“Tony”の間に前置詞“for”が入り込んだので、動詞“did”は“Tony”に直接機能しなくなったのである。前置詞“for”を仲介役として“Tony”とは直接的に結びつかなくなったのである。“Tony”単独では名詞機能であるが、前置詞と結びついた結果、“Tony”は“for Tony”という副詞機能としての語句に変化して、意味変化を起こさせたのであった。変化した意味は文構造と深い関係があり、文構造と意味変化の非乖離的現象が起きているのである(もっとも意味変化が生じなくても、文構造と意味は常に非乖離的關係が生じているのである)。(8)aの文構造は次のようになる。即ち、その構造を公式化すると、主語(Subject)をSで表し、動詞(Verb)をVで表し、目的語(Object)をOで表し、副詞語句(Adverbial phrase)をA dpとして表した場合、次のようになる。¹⁸⁾

S (= We) + V (= did) + O (= it) + A dp (= for Tony).

ここで新たに出てきた専門用語に副詞的目的格、前置詞補語、副詞(語句)などがいるが、まず副詞的目的格と副詞語句は、副詞という品詞から派生してきた機能と名称をもっているので、まず副詞について考察して見たいと思う。副詞というのは、英語では“adverb”と表記しているが、ラテン語の *adverium* からきた言葉で、*ad- + verb + -ium = adverb (ium)* となり、*ad-*はラテン語からの借り入れ語に使われ、語幹に結び付けられる正式な語形成上の接頭語である。その意味は“toward”で、指し示された方向、傾向、付加などを表している。次にラテン語の *verb (um)* は、英語の“verb”の事で、その意味は英語の“word”の事である。ここから推測される事は“verb”と“word”がほとんど同一概念であった可能性が考えられる。そこで“verb”を「動詞」としてとらえた場合、“adverb”の基本概念は「動詞の方向へ」という考え方が出てくるのはうなづけるのである。従って副詞は、まず動詞を修飾するというのは納得できるのである。しかしなぜ形容詞や、他の副詞・副詞語句などを修飾できるのかは問題として提起できると考えられる。

上の公式との関係で論を進めると、動詞をその機能に基づいた意味論から観察した場合、基本的に二つの意味が存在している。それは動作動詞と状態動詞である。別名それらは一般動詞と連結動詞と呼ばれている。一般動詞の最も基本的表記は“have”で表され、連結動詞の最も基本的表記は“be”で表される。換言すれば“be”動詞以外は全部動作動詞または一般動詞という事になる。日本語の動作動詞という表現も象徴的表記にしかすぎないのである。理由は日本語の動詞は数多くあるし、英語の“have”動詞という表現も象徴的表記にしかすぎな

いのである。理由は日本語と同じように、英語にも数多くの動詞が存在しているからである。ちなみに手元にある学習用の英和辞書の不規則動詞表に掲載されている動詞の数をかぞえたところ311の動詞があった。辞書に掲載されている不規則動詞以外の動詞の数はかぞえきれないものがあると考えられる。さらに新語を加えると膨大な数にのぼると推測できる。中には廃語になってしまうのを考えると、正確な数字を割り出そうとするとかなりの努力を要すると思われるので、手を出したくないというのが本音ではないだろうか。

話を文の構造論に戻すと、(8) a の例文の“for Tony”は、上述の副詞論に基づいて、動詞を修飾している事になる。前置詞の“for”と、名詞の“Tony”が結びつく事によって、前置詞でもないし、また名詞でもない全く別の機能に変化する事は、語の機能変化と言える。何故そのようになるのかという疑問に対して、はたして納得できる答えがだせるのだろうか。現段階に於いては答えを見いだせる何らかの情報は提供できるかも知れないが、それも完全ではないことは確かであろう。前置詞は英語で“preposition”と表記するが、中世英語では“*preposicioun*”と表記されていた。恐らくこれもラテン語からの借り入れ語と考えられる。ラテン語では“*praeposition*”と表記し、その機能は接頭語であり、具体的には動詞や名詞や形容詞を修飾して、語句の形成のためには名詞とか形容詞の前に置いて、空間的關係、時間的關係、¹⁹⁾ その他の關係を關係表現をするようにしているのである。従って“for Tony”と言った場合、それはトニーの全人格的な事をも含めて、主語である我々が“we”トニーのために“for Tony”事を“it”行なった“did”という事になる。これを英語の構造でその意味を伝えるならばつぎのようになる。

- (9) a. We → did → it → for Tony.
 b. 我々は → トニーのために → それを → した。

上述の前置詞に関する解説で考察しなければならない問題は、空間的關係および時間的關係であろう。前置詞における空間的關係は意味論的關係を示唆していると思われる。そこで、“for Tony”に使われている前置詞“for”の考察が必要となってくる。

前置詞としての“for”には、32の意味と用法があるが、第14義目に同意義と思われる項目と簡単な例句が見つかった。²⁰⁾

副詞の本質：

副詞の実体は副動詞と言える。

上述の定義を前提として、副詞について下記のような議論も可能である。

これを踏まえて、今度は(1) c の例文の“to my bank”の語句に戻って論究してみると、(8) a の“for Tony”と同じように、前置詞“to”の介在によって動詞“sent”と直結し得なくなってしまったのである。前置詞“to”と名詞句“my bank”が結びつく事によって“to my bank”となって副詞語句となったのである。これを解りやすく説明するために、“to my bank”を抽象的に、しかも同じ機能をもたせて別な語に変えた場合、“to my bank”が場所を表す語句なので、“there”への置き換えが可能になるのである。しかし意味論的には曖昧性が残るものの、“there”の辞書の意味が“in / into / to / at that place”なので、場所表示記号として、両語句には共通性が存在するのである。従って(1) c の例文を次のように書換える事は可能である。

- (9) a. I sent a letter *there* / *to that place*.
 b. 私は手紙をそこに / その場所に送った。

この場合、話し手側は“there”の場所が認識されているが、聞き手側は必ずしもその場所を認識しているとは限らない場合がある。この段階で話し手と聞き手を登場させたのは、言語の目的が意志疎通に他ならないからである。それはこの論文の筆者がつぎのように英語で記しているからでもある。その引用文は次の通りである。

Language, which was given to human beings by the Creator, was intended for all who use it as a means of inspired and realistic communication with one another.²¹⁾

この引用文の主張は、「言語は基本的に聖なる靈感の下に現実的な意志疎通を図るために人類に賦与されたものである」というのが基本理念になっている。これを前提として話し手側と聞き手側との間には相互理解がなされなければならないのである。

この理念をさらに裏付ける資料の一つに、言語に関するアメリカナ百科事典の解説があるので、それを以下に引用しておく。

LANGUAGE, the faculty and the ability, possessed by normal human beings and by no other species, of using a spoken or written utterance to represent mental phenomena or events. Most fundamentally it is the association of speech sounds with thoughts, concepts, or images, in the mind, and the ability both to produce and to interpret such sounds in recurrent patterns. *The primary purpose of language is communication among persons.* Natural human language by which one person speaks his mind to another is the defining case of language. Of course, the word also applies to the product of this faculty, both spoken and written.²²⁾

この主張を要約すると、「言語は唯一人類によってのみ所有されており、話す音と思想や概念や心像が一致したものであり、その主要な目的は人と人との間における意志疎通にある」となる。

それでは次に文の主要構成要素である主語と述語、そして二つの構成要素の中に組み込まれているそれぞれの部分が分離できない理由があるが、それをこの論文の筆者が別な資料に書き表したに日本語（必要な場合には筆者自身が書き加えたり、削除したりする場合があることを前提として）を用いながら考察を試みて論をすすめたいと思う。

英語は一つの川の流れのようなものであり、川には水がながれていて、水は高い所から低い所に流れるように、逆流する事がないのである。英文の左端を源流とするならば、英語の流れは左から右に流れて、ひたすら右端をめざして行くのである。水が川の流れとするならば英文は言葉のながれの川である急流もあるし狭い所もあるし、浅い所、深い所もあり、滝もあるのである。川の流の水のようになって、英語という水の流れに沿って行け

ば自然と右端の終点という海原へたどり着くのである。英文の右端の終点にたどり着くためには、英語という水の流れの性質をよく知っておいた方が良いのである。後は英語という水の流れに自分の考えという船をゆだねるだけで良いのである。そうすると自然にあなたの船は右端までたどり着くのである。但し船を岩や岸にぶつけたりしないように舵取りだけはしっかりとやってほしいのである。あなたの考えという船の船長はあなた自身であり、他人ではないのです。

上述の日本語を英語で言い換えると、およそ次のようになるであろう。

In the English language there is what we call “word order” or “the rules of English sentence.” I like to call it “the stream of the English sentence.” There is a certain flow of logic or thinking here. The water of the river goes down the stream. It never goes up the stream. If you float a boat on the water of the stream, the boat moves down the stream toward the ocean. The boat moving down on the water of the stream might be compared to what you read and think in English. There are shallow places, deep places, rapid streams, and even cascades or falls in a river. When you steer the boat to the destination, you must control it carefully and you can reach your goal. When you read or think in English, you have to try get what the real meaning is. There are not only surface meanings and a wide variety of meanings, but also deeper meanings and hidden meanings in English sentences. If you must manage yourself carefully when you read and think in English, you will be able to get what the real meaning is. You become the captain of your boat. If you control the boat carefully, you will be able to move the boat along the stream of the river to the direction where you aim and then go down to the ocean.²³⁾

上述の引用文の解説を試みながら言語の存在意義について論究する事は、極めて重要な事である。理由は言語について上述した統語論と意味論との関係を探りつつ、鳥瞰的に言語を観察することは、顕微鏡的に文法事項と意味との関係を論究しながら、一方では大局的に言語観察を進めることによって、言語全体を総論的及び各論的にとらえていく事ができるからに他ならないのである。言語を各論的に観ていく事は、物事の事実や、思想や、考えや、あるなんらかの事実を相互に伝えあうためである。総論的には言語を通して人間が生きていくための知恵を見いだす事ができるからである。人に質問したり、話をしたりするという事は、意志疎通自体が目的ではなく（重要な要素ではあるが）人がこの地上にいるあいだ生きていくための最も有効な情報交換の空間（A Spatial relationship）と時間（A Spatial temporal relationship）なのである。この時間と空間は小説や詩を書いたり、それを伝えたりすることに繋がっていくからである。要約すれば、人が聴いたり、話したり、読んだり、書いたりする事は、動物と違って、最も重要な事柄であり、人間を人間たらしめているのである。

次に、文構造と意味との関係をさらに明らかにするためには、文の定義について考察する必要がある。文は単語と単語がその言語構造に沿って組み合わされている。これを前提とするならば、文を構成している単語について考察する必要がある。単語を構成しているのは一つ一つ

の文字である。単語を考察するためには、文字について考察する必要がある。即ち、文字の定義を考察する必要がある。文字は英語で“letter”であり、その機能は意志疎通図るために存在するようになったと考えられる。文字である以上それぞれの言語においては特有の形で書かれている。それが人から人へと伝えられていくのである。人から人へと伝えられる時に意志疎通が始まるのである。英語には英語特有の文字の形と意味がある。同じように日本語には日本語特有の文字の形と意味がある。例えば「言葉」を英語で表記する場合には、*W-O-R-D* という一つ一つの文字を綴って、“word” としなければならないのである。もし仮にこれが *dwor* と綴られたとした場合、全然意味がなさないのである。間違った文字の配置は言葉ではないのである。この問題は「字の綴り」あるいは「綴り字」という分野でもある。日本語の「ひらがな」の場合は「ことば」というように綴り、漢字の場合は「言」と「葉」を合わせて、「言葉」と綴って、はじめて意味をなしていくのである。²⁴⁾ 「言葉」を和英辞典で調べてみると、英語の表現は以下の通りであった。

ことば 言葉 〈言語〉 speech; language; 〈単語〉 a word; 〈句〉 a phrase; 〈表現〉 an expression; 〈用語〉 a term; 〈国語〉 a language; (文) a tongue...²⁵⁾

和英辞典の解説によると、〈 〉印内の文字の意味は、意味の区別を示しているとしている。(文)の意味は、本来は二重括弧でくぐられているが、その記号が機械に準備されていないので、普通の一重の括弧を使用したものである。この辞書としての意味は以下の通りであった。

(文)の表示は、日本語で言う「文語」よりももっと意味を広げて、日常会話で使うには堅い感じでありあまり使われない英語にすべてつけてある。この表示は文脈によってきまる相対的なものであって、ある特定の語が常に(文)であるとは限らない。例えば、「手を伸ばす」を *extend one's arm* と表現するのは(文)であるが、一般的に物を「伸ばす」意味で使われた *extend* は(文)ではない。*get* [*grow*, (文) *become*] *rich* の場合は *get*, *grow* に対して *become extinct* などの句では *get*, *grow* などは用いられず、*become* に堅い感じはないので(文)ではない。*confess* (to) *one's crime* [*sin*]; *confess that one has committed a crime*; (文) *confess oneself guilty* のように、使い方によって(文)となる例もある。また、かなりくだけた話の中でも、面白味を持たせるために(文)の語を使うことも珍しくない。要は、(文)であることを承知の上で使うことである。なお、準専門語と考えられる用語、例えば *antibacterial* (抗菌性の)、(the art of) *mnemonics* (記憶術)のような語については、特に(文)の表示はしない。

上の解説から判断する限り、比較的堅い感じのする表現に対して(文)の表示をしているようであるが、その区分はこの限りでははっきりうちだされていない。例えば、一般的に使われない専門用語に関しても特に(文)の表示はなされていないのである。考えられる理由は、はっきりした区分をすることが極めてむずかしいという判断がなされたからではないだろうかと思われるからである。

今度は逆に上記の英和辞典に記されている「ことば」に関する英語の表示を次に示して見ることとする。それらは次のとおりである。

- speech** 1 a 演説、スピーチ、(…の) b (演劇で一度にしゃべる長い) せりふ.
2 a 話すこと、発言；もの言う力 b 話し方、話しぶり.
3 a 話し言葉；b 国語；方言.
4 談話、会話.
5 スピーチ研究、スピーチ学.
6 [文法] 話法.²⁶⁾

この英和辞典によれば、“speech”の意味は「話し言葉」ということになり、書き言葉の意味は含まれていないことになる。

次に“language”の項目を調べてみると、下記の意味が出されていた。

- language** 1 (音声・文字による) 言語.
2 (一国・一民族などの) 国語. …語.
3 専門用語、術語.
4 語法、文法、言葉づかい、言い回し.
5 (音声・文字を用いない、花言葉・身ぶり言葉などの) 言葉 (鳥獣などの) 鳴き声.
6 語学、言語学.
7 下品な言葉、悪態、ののしり.²⁷⁾

この辞典による“language”の意味は、話し言葉・書き言葉の両方に意味を含めた「言語」の意味になっている。第1義は話し言葉と書き言葉の両特性をあらわしている。第2義は、話し言葉の特性が強いにもかかわらず書き言葉の特性をもあらわしている。第3義は書き言葉を基本にして、話し言葉でも用いられる。第4義の語法・文法は書き言葉としての特性が極めて強い語義である。第5義は話し言葉・書き言葉ではない第3仕様の語義である。即ち、「記号」または「合図」である。また動物としての言葉である「泣き声」でもある。ここで問題が提議されるとしたら、動物の泣き声はたして「言葉」であるかどうかの点である。しかし英語ではそれらを含めて“language”範疇にいられている。第6義の「言葉づかい」や「言い回し」は話し言葉の特性を有している。但し第7義は明らかに話し言葉の特性を如実に表している。

次に、“word”については次のような意味が辞書には出ていた。

- word** 1 語、単語.
2 a [しばしば複数形で] (口で言う) 言葉、話、談話
b [] [+ to do] <…する> 言葉、話、談話
3 a 知らせ、便り、消息、伝言
b [+ that] <…という> 知らせ、便り、消息
4 a [one's ~] 約束、誓言、言質
b [one's ~] [+ that] <…という> 約束
5 [通例単数形で] [one's~, the ~] a 指図、命令、言葉による合図
b [+ to do] <…せよとの>

- 6 [複数形] a (曲に対して) 歌詞
 b (芝居のせりふ) せりふ、台詞
 7 [the W~] 神の言葉、聖書、福音、福音、キリスト

上記“word”に対して七つの語義をあげているが、それらの共通意義は、「話し言葉」である。すくなくとも書き言葉を強調している要素とは言い難い。第1義の「語、単語」は話し言葉および書き言葉の両方の特性を持っている。第2義から第6義までは、話し言葉の特性を持っている。特に第6義は芸術的特性を有している。第4義は厳粛性を有している。第7義は話し言葉と書き言葉の両方の特性をもっていて、宗教的特性を持っている。

次に“phrase”について調べてみることにする。

- phrase** 1 [句] [2語以上の集合体で意味機能上の一単位をなすもの；cf. clause 1]
 2 成句、熟語、慣用句、決まり文句
 3 言い回し、語法、言葉づかい
 4 名言、警句
 5 [楽] 楽句

第1義は意味論的観点からの定義である。節と対照してみると、節“clause”は第1義が節、第2義が(条約・法律の)条項、個条、[ラテン語「閉じる」の意]となっているだけである。OCELは“phrase”について次のように述べている。

(1) In general usage, any small group of words within a sentence or a clause, such as ‘in general usage’, ‘small groups’ and ‘a clause.’ Such a group is usually recognized as having a syntactic structure: groups like *usage any* and *or a would not normally qualify as phrases*. (2) In grammatical theory, a unit that does not have the structure of a sentence or clause, and cannot therefore be analysed in terms of subject, verb, and object.²⁸⁾

ここでは節を二つに分けて解説している。第一に一般的用法として、文・節のなかにある小さな語群を指すしている。例えば、「一般的な用法で」とか「ちいさな集団」とかあるいは「一節」等である。これらの語の集団は統語論的構造を有していると言えるのである。統語論的構造を有しているということは語順の違いや綴りの違いは排除される。また句は主語や動詞や目的語といった観点からの文法理論は適用されないのである。

次に“expression”について触れてみる事にする。その意味は次のとおりである。

- expression** 1 a 表現(すること)
 b [気持ち・性格などの] 表れ、しるし
 2 (言葉の) 言い回し、語法、語句、辞句
 3 (顔・目などの) 表情、顔つき
 4 表情 [表現] 豊かなこと、表現力

- 5 [音楽] 表出、発想、表現
 6 [具体的には] [数] 式²⁹⁾

この中で特に目立つのは1 bの気持ち・性格と3と4の表情である。これらは人間性の側面を言い表わしている語義である。2は言葉の観点からの意味で、5と6は専門的立場からの語義である。

つぎに“term”を見てみることにする。その意味は次のとおりである。

- term** A 1 (学校・大学の3学期制度の) 1学期
 2 a (一定の) 期間、期限、任期
 b (家賃・賃金などの) 期日、勘定日、出産予定日
 B 1 a (専門分野での) 術語、用語、専門語
 b [論] 名辞
 2 [複数形で] 言い方、表現
 C 1 [複数形で] [人との] 交際関係、間柄
 2 [複数形で] 支払い・料金などの) 条件、要求額、値段、料金、賃金
 3 [] 協約、同意、折り合い
 4 a [数] 項
 b [幾] 限界点 [線、面]³⁰⁾

この“term”はかなり専門的關係用語集になっている。B 2がごく一般的言い方である。教育、賃金、家賃、料金、契約などの経済専門等の事柄が特徴である。

2. 文脈における動詞の意味

それでは次に情報収集した資料にもとづいて聖書言語の動詞を中心とした文構造について論究して見たいと思う。³¹⁾ 今回動詞は準動詞も含めることにした。理由は準動詞もあるひとつの形をした動詞だからである。資料に基づく集められた動詞の数は全部で169の動詞であった。まず手続きは例文一つ一つにあたっていった。今度はそれを同じ動詞表現毎に整理していき、使われている動詞が文脈の中でどういう意味をもっているか考察された。まず最初にそれらの動詞を列挙しておきたいと思う。

- | | | | |
|----------------|---------------|-----------|--------------|
| 1. saw | 2. bore | 3. became | 4. said |
| 5. Give | 6. die | 7. burned | 8. said |
| 9. Am | 10. withheld | 11. said | 12. is |
| 13. go (in) | 14. bear | 15. have | 16. gave |
| 17. went | 18. conceived | 19. bore | 20. said |
| 21. vindicated | 22. heard | 23. heard | 24. named |
| 25. bore | 26. bore | 27. said | 28. wrestled |
| 29. prevailed | 30. named | 31. saw | 32. stopped |
| 33. took | 34. gave | 35. bore | 36. said |
| 37. named | 38. bore | 39. said | 40. am |
| 41. call | 42. named | 43. went | 44. found |
| 45. brought | 46. said | 47. give | 48. said |

49. Is	50. to take	51. take	52. said
53. lie	54. come	55. went	56. to meet
57. said	58. come	59. hired	60. lay
61. gave	62. conceived	63. conceived	64. said
65. given	66. gave	67. named	68. conceived
69. bore	70. said	71. endowed	72. dwell
73. borne	74. named	75. bore	76. named
77. remembered	78. gave	79. opened	80. conceived
81. bore	82. said	83. taken	84. named
85. saying	86. give	87. came	88. borne
89. said	90. send	91. go	92. Give
93. served	94. let	95. depart	96. know
97. rendered	98. said	99. pleases	100. stay
101. divined	102. blessed	103. continued	104. Name
105. give	106. said	107. know	108. served
109. fared	110. had	111. came	112. increased
113. blessed	114. turned	115. provide	116. said
117. give	118. said	119. give	120. do
121. pasture	122. keep	123. let	124. pass
125. removing	126. be	127. answer	128. come
129. come	130. speckled	131. spotted	132. found
133. be	134. considered	135. stolen	136. said
137. let	138. be	139. removed	140. gave
141. put	142. fed	143. took	144. peeled
145. exposing	146. was	147. set	148. expeeled
149. came	150. to drink	151. mated	152. came
153. to drink	154. mated	155. brought	156. separated
157. made	158. put	159. put	160. came
161. were	162. mating	163. place	164. mate
165. was	167. were	168. became	169. had

以上が基礎資料に使用されていた動詞とその数であった。

今度は上記の動詞をアルファベット順に整理してみると次のようになった。尚、アルファベット順に整理して列挙した根拠は、最初に辞書の意味を提示して、それに基づいて文脈上の意味考察をするための基礎をつくるためである。数字はその動詞が基礎資料の中で使用された回数と使用箇所を示しているが、それらは以下の通りである。

1. Am / am	2	Gen. 30: 2, 13.
2. answer	1	〃 〃 33
3. be	2	〃 〃 32, 33.
4. be (Inf.)	1	〃 〃 34.
5. bear	1	〃 〃 3.
6. became	2	〃 〃 1, 42.
7. blessed	2	〃 〃 27, 27.
8. borne	1	〃 〃 20, 25.
9. brought	2	〃 〃 14, 39.
10. burned	1	〃 〃 2.
11. bore	9	〃 〃 1, 5, 7, 10, 12, 17, 19, 21, 23.
12. call	1	〃 〃 13.
13. came	5	〃 〃 25, 30, 38, 38, 41.
14. come	3	〃 〃 16, 16, 33.
15. conceived	5	〃 〃 5, 7, 17, 19, 23.
16. considered	1	〃 〃 33.
17. continued	1	〃 〃 28.
18. die	1	〃 〃 1.
19. divined	1	〃 〃 27.

20. depart	1	ゝ	ゝ	26.
21. do	1	ゝ	ゝ	31.
22. to drink	2	ゝ	ゝ	38, 38.
23. dwell	1	ゝ	ゝ	20.
24. endowed	1	ゝ	ゝ	20.
25. expeeled	1	ゝ	ゝ	38.
26. exposing	1	ゝ	ゝ	37.
27. fared	1	ゝ	ゝ	29.
28. fed	1	ゝ	ゝ	36.
29. found	2	ゝ	ゝ	14, 33.
30. gave	6	ゝ	ゝ	4, 9, 17, 18, 22, 35.
31. give	7	ゝ	ゝ	1, 14, 25, 26, 28, 31, 31.
32. given	2	ゝ	ゝ	6, 18.
33. go	2	ゝ	ゝ	3, 25.
34. had	2	ゝ	ゝ	30, 43.
35. have	1	ゝ	ゝ	3.
36. heard	1	ゝ	ゝ	6.
37. hired	1	ゝ	ゝ	16.
38. increased	1	ゝ	ゝ	30.
39. is	3	ゝ	ゝ	3, 15, 33.
40. keep	1	ゝ	ゝ	31.
41. know	2	ゝ	ゝ	26, 29.
42. lay	1	ゝ	ゝ	16.
43. let	3	ゝ	ゝ	31, 34, 36.
44. lie	1	ゝ	ゝ	15.
45. made	1	ゝ	ゝ	40.
46. mate	1	ゝ	ゝ	41.
47. mated	2	ゝ	ゝ	38, 39.
48. mating	1	ゝ	ゝ	41.
49. to meet	1	ゝ	ゝ	16.
50. Name	1	ゝ	ゝ	28.
51. named	8	ゝ	ゝ	6, 8, 11, 13, 18, 20, 21, 24.
52. opened	1	ゝ	ゝ	22.
53. pass	1	ゝ	ゝ	32.
54. pasture	1	ゝ	ゝ	31.
55. peeled	1	ゝ	ゝ	37.
56. place	1	ゝ	ゝ	41.
57. pleases	1	ゝ	ゝ	27.
58. prevailed	1	ゝ	ゝ	8.
59. provide	1	ゝ	ゝ	30.
60. put	4	ゝ	ゝ	36, 40, 40, 42.
61. removing	1	ゝ	ゝ	32.
61. remembered	1	ゝ	ゝ	22.
62. removed	1	ゝ	ゝ	35.
63. rendered	1	ゝ	ゝ	26.
64. said	20	ゝ	ゝ	1, 2, 3, 6, 8, 11, 13, 14, 15, 15, 16, 18, 20, 23, 25, 27, 29, 31, 31, 34.
65. saw	2	ゝ	ゝ	1, 9.
66. send	1	ゝ	ゝ	25.
67. separated	1	ゝ	ゝ	40.
68. served	2	ゝ	ゝ	26, 29.
69. set	1	ゝ	ゝ	38.
70. speckled	1	ゝ	ゝ	33.
71. spotted	1	ゝ	ゝ	33.
72. stay	1	ゝ	ゝ	27.
72. stolen	1	ゝ	ゝ	33.
73. stopped	1	ゝ	ゝ	9.
74. saying	1	ゝ	ゝ	24.
75. take	1	ゝ	ゝ	15.
76. to take	1	ゝ	ゝ	15.

77. taken	1	〃	〃	23.
78. took	2	〃	〃	9, 37.
79. turned	1	〃	〃	30.
80. vindicated	1	〃	〃	6.
81. was	2	〃	〃	37, 42.
82. went	3	〃	〃	4, 14, 16.
83. were	2	〃	〃	41, 42.
84. withheld	1	〃	〃	2.
85. wrestled	1	〃	〃	8.

この資料からも解ることであるが、告知動詞である“said”がもっとも回数が多く使われている。前回の紀要でも告知動詞の数は19回にわたってつかわれていたが、今回の資料では20回という数字をだしている。これはどういう事を意味しているのかというと、内容またはメッセージの伴った言葉には、伝達という重要な任務を帯びているので、内容の重要度が増せば増すほど、それに比例して告知動詞が使われてくる回数が増加する事を物語っているのである。この告知動詞が意志疎通を図るための重要な鍵を握っていることは、ほぼ間違いないであろう。意志疎通は英語で“communication”というが、この言葉はラテン語からフランス語を経由して英語に導入されたと考えられる。ラテン語では“*communicatio*”と表記されるが、その意味するところは、英語では“making common”で、「普遍化を図る」とか「一般化する」という意味に通じていく。意志疎通の基本概念は、人や動物や機械などの行動が言語とどういう関わり合いを持っているのかという事と理解される。³¹⁾「意志疎通」または“communication”の役割は発進側と受けて側の間でやりとりが行なわれる際の情報とかメッセージ等を正しく伝達する事にあるわけだが、その情報とかメッセージは正しい伝達方法を媒介して伝えなくてはならない。特に言語学においては、発信者・受信者とも人間である場合は言語が複雑に発達・体系化されたものである。このように複雑に体系化された言語を通じて発信された情報に呼応して、再び環流させる事が中心的役割を担う事になるのである。理論的には、コミュニケーションは発信と受信が一致してはならないのである。実際さまざまな障壁があるにもかかわらず、それを許容しているのが現実の姿ではないだろうか。このような障壁の事を専門用語では「雑音」、英語では“noise”と言っている。時としてこのような障壁が効果的な伝達を狂わしてしまうので注意が必要である。³²⁾

それでは次に、基礎資料において20回も告知動詞が使われている例文に基づいて、どういう伝達が行なわれたか、また発信者と受信者は誰で、どんな方法を使ってなされたのかを検証して見たいと思う。例文表示方法は基本的に、日本語・英語の順であるが、実際的には英語・日本語の順序が便宜的な時もあるので、後者の順序を使う時もある。

- (1) a ラケルは自分がヤコブに子を産んでいないのを見て、姉を嫉妬し、ヤコブに言った。「私に子どもをください。でなければ私は死んでしまいます。」創30：1。
- b Now when Rachel saw that she bore Jacob no children, she became jealous of her sister; and she said to Jacob, “Give me children, or, else I die” Gen. 30: 1

発信者：ラケル/Rachel、受信者：ヤコブ/Jacob。

発信内容は次の通りであった。発信者は受信者に対して、まず第一に「子どもがほしい」という内容を伝えた。第二の発信内容は「子どもをくだらないなら、本人は死ぬつもりである」事を伝えた。発信理由は「発信者自身結婚していたにもかかわらずまだ子どもを産んでいなかったから」である。それを英語では“saw”という知覚動詞で表現しているのである。英語の“see”は基本的には視覚動詞であるが、発信内容から判断されるのは単に物理的に物を見たのではなく、発信者自身が置かれている立場を、発信内容から判断されるのは単に物理的に物を見たのではなく、発信者自身が置かれている立場を、発信者自身が悟った事を表している表現でもある。また当時の社会的状況として、結婚して子どもが産まれないのは発信者・受信者の両者にとってある種の恥でもあったのである。これらの要因が重なって発信者は自分の姉に対して、「うらやむ」と「憎む」という重複された「嫉妬」という感情を抱いたのであった。発信者にとっては必死の思いであったのである。その表現が実際に死ぬ訳ではないが、「でなければ私は死んでしまいます (...or, else, I die)」に凝縮された表現となったのである。

Notes／註

- 1) Tom McArthur, *The Oxford Companion to the the English Language* (Oxford: Oxford University Press, 1992), “POLYSEMY.” [Cited hereafter as *OCEL*.]
- 2) *Ibid.*
- 3) Hiroshi Baba, *A Comparative Study for Japanese in Learning English (X X V)*: Shokei College Bulletin, sep. vol., 2005), p.78.
- 4) R. M. W. Dixon, *A New Approach to English Grammar, on Semantic Principles* (New York: Oxford University Press, 1991), pp.3-15.
- 5) *Ibid.*
- 6) *Ibid.*
- 7) Spiros Zodhiates, *The Hebrew-Greek Key Study Bible, New American Standard Bible* (Chattanooga: AMG Publishers, 1977), 1 Cor.14: 10. [Cited hereafter as *H-GKSB*.]／世界にはおそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばなど一つもありません (N J B／新改訳、第三版、東京：日本聖書刊行会)、コリント人への手紙第一、14章10節。尚、2003年11月25日、第三版の後継として、改訂第三版が日本聖書刊行会より発行されたので、同書簡の14章10節を以下に転載しておく。「世界にはおそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばなど一つもありません。」この節の旧第三版と改訂第三版の表記変化はなかった。
- 8) R. M. W. Dixon, *ibid.*, p.9.
- 9) Raurence Urdang, *The Random House Dictionary of the English Language*, College ed. (New York: Random House, 1968), s.v. “predicate.” It says: (in many languages, as English) a syntactic unit that functions as one of the two main constituents of a simple sentences, the other being the subject, and that consists of a verb and of all the words governed by the verb or modifying it, the whole often expressing the action performed by or the state attributed to the subject, as *is here* in *Larry is here*. [Cited hereafter as *RHDEL*.]
- 10) *OCEL*, s.v. “PREDICATE.”
- 11) *Ibid.*, s.v. “**VERB**.” It says as follows: A class of words that serve to indicate the occurrence or performance of an action, or the existence of a state or condition...
- 12) *OCEL*, s.v. “**PART OF SPEECH**,” saying, “Traditional grammars of English generally list eight parts of speech: *noun, pronoun, verb, adjective, adverb, preposition, conjunction, interjection*.”
- 13) *RHDEL*, s.v. “verb.” It clearly says that any member of a class of words that function as the main elements of predicates, typically express action or state, may be inflected for tense, aspect, voice, and mood, and show agreement with subject of object.
- 14) *Ibid.*, s.v. “**OBJECT**.” It gives a brief reference to the idea of object: “Object is a major functional

element in the structure of clauses, present in any sentence with a transitive verb. With verbs that can have two objects, the *indirect object* generally refers to the recipient of what is denoted by the *direct object*."

- 15) *OCEL.*, s.v. "OBJECT."
- 16) *Ibid.*, s.v. "NOUN."
- 17) Every example in English is translated into Japanese by the writer of this paper.
- 18) Hiroshi Baba, *A Comparative Study For Japanese in Learning English* (Natori: Shokei College Bulletin, 2005), sep. ed., p.77-82, p.84.
- 19) *RHDEL.*, s.v. "preposition," saying, "Gram, any member of a class of words that are used before nouns or adjectives to form phrases functioning as modifiers of verbs, nouns, or adjectives, and that express a spatial, temporal, or relationships, as *in, on, by, to, since*."
- 20) *Ibid.*, "for," saying as follows: 1. with the object or purpose of: *to run for exercise*. 2. intended to belong to, or be used in connection with: *equipment for the army; a closet for dishes*. 3. suiting the purposes or needs of: *medicine for the aged*. 4. in order to obtain, gain, or acquire: *a suit for alimony; to work for wages*. 5. (used to express a wish): *O, for a cold drink!* 6. sensitive or responsive to: *an eye for beauty; an ear for music*. 7. directed to; centered or focused upon: *a longing for something; a taste for fancy clothes*. 8. in consideration of, or in return for: *three for a dollar; to be thanked for one's efforts*. 9. appropriate or adapted to: *a subject for speculation; clothes for winter*. 10. with regard or respect to: *pressed for time; too warm for April*. 11. during the continuance of: *for a long time*. 12. in favor of; on the side of: *to be for honest government*. 13. in place of; instead of: *a substitute for butter*. 14. in the interest of, or on behalf of: *to act for a client...*
- 21) Hiroshi Baba, *A Narrow Road to "Thinking in English"* (Sendai: Hi アソシエイツ、1999)、pp.66-70.
- 22) *Encyclopedia Americana*, vol., 16, s.v. "LANGUAGE."
- 23) Hiroshi Baba, *Ibid.*, pp.29-31.
- 24) Yaeko S. Habein, Gerald B. Mathias, *The Complete Guide to Everyday Kanji* (Tokyo: Kodansha International Ltd., 1991), p.55, 243, saying: (言) combines a representation of an edged tool with 口 to symbolize punctuation of utterance. It means "say; speak; word;speech;call." 葉 (ヨウ/は) adds (くさかんむり) (plant) to the phonetic (leaves) and still means "leaves." The phonetic originally depicted leaves on a tree.
- 25) *Kenkyusha's New Collegiate Japanese-English Dictionary*, 3rd.ed.,s.v. "ことば" [Cited hereafter as *KNCJ-ED*.]
- 26) *Kenkyusha's New College English-Japanese Dictionary*, 6th ed. (Tokyo: Kenkyusha, 1998), s.v. "speech."
- 27) *Ibid.*, s.v. "language."
- 28) *OCEL.*, s.v. "PHRASE."
- 29) *KNCE-JD*, s.v. "expression"
- 30) *Ibid.*, 6ed., s.v. "term."
- 31) *OCEL.*, s.v. "communication."
- 32) *Ibid.*